

アイガモ農法 と“(株)ちから”の 挑戦 = 四万十市西土佐 =

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は四万十市西土佐から、アイガモ農法と(株)ちから についてお伝えします。



逆S字に流れる四万十川が、太平洋側に大きくその進路を変え、大河らしさを見せ始める、四万十市西土佐。四万十市北部に位置する西土佐は、他の中山間地同様、様々な課題を抱えた、人口3300人ほどの地域である。その西土佐に、“株式会社 ちから”の代表を努める、浜田兆城^{ヒラタ}さん(34歳)を訪ねた。

株式会社 ちから

昨年3月半ば、西土佐にある5つの建設会社は、『建設業と地域の元気回復助成事業』で助成金を得て、地域の特性を活かすための農業関連事業を行う“(株)ちから”を立ち上げた。

「“建設業”と“農業”という異業種が手を組むことにより、地域に新たな展開・可能性が生まれてくる」
浜田さん達は、この法人を立ち上げて、地域の人々の協力を得ながら、アイガモ農法による稲作、耕作放棄地を利用した果樹園づくり、近年問題になっている害獣対策など、新たな農業に次々と取り組みつつある。

浜田さんは、本業の建設の仕事で山間部に入ることも多い。

「今は耕作放棄地となっても、かつては田んぼで、しかもよく手入れされていた土地だったことが、残された石積みなどからわかります。昔はいろいろなところに手を入れていたのだなあと感じます。こういう土地を、何かよい方法で使えないかとずっと考えていました。」

「会社の理念として、『安心・安全な農作物を作る。それによって日本人の財産である四万十川の環境保全に寄与する。』と考えています。なので、農業・化学肥料は極力使わない農法を実践します。それは、自分たち“つくる側”は、四万十川の環境に負荷を与えない、環境に配慮したものをつくるということですが、その農作物を“買う側”にとっても、買うことがすなわち“四万十川の環境保全のお手伝いをする”という意味の背景を付けたい、そう考えたのです。そして、単一作物を沢山作るのは、栽培の面でのリスクがあることと販売面での困難さを考え、少量でも多品種を栽培し、それらの作物の栽培・収穫・加工を体験・経験することをパッケージにして営業していきたいと考えています。」

アイガモ農法での稲作

彼らが、現在2hの水田で取り組む“アイガモ農法”とは、ご存じの方も多いと思うが、水田にアイガモ(家禽のアヒルとマガモを交配して生まれた鳥)を放ち、害虫や雑草を食べてもらうという、減農薬・無農薬の米作りだ。ここ数年四万十川流域でも、梶原町の棚田や四万十市などで、アイガモ農法によって米作りをする農家が増えてきている。この農法に興味を持った浜田さんは、5年ほど前、10aの田んぼでアイガモ農法をスタートさせた。兼業農家に育った浜田さんではあるが、たいした農業経験もないままにアイガモ農法の本を読みながら、ほぼ独学でこの稲作を始めた。

「まだまだ試行錯誤で、米の出来を考えるより、アイガモがカラスなどに襲われないようにと“害獣対策”に追われる日々です。でも昨年からは耕作面積を増やし、(株)ちからで本格的にアイガモ農法の稲作を始めました。」

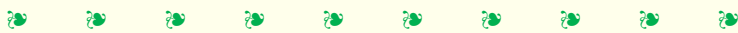
ところで、アイガモは任務が終わる収穫の秋には処分される。これは一つには、アイガモは元々人間が交配してつくった家禽であるため、自然界には放鳥できないという理由もあるようだ。浜田さんは言う。「それを“かわいそう”ということで終わらすのではなく、人間は生きていくため“他の命を頂いている”ということも教育に使っていきたい。子ども達が“安全な食”や“環境問題”に関心を持つだけでなく、自然との共存や命の大切さをそこから伝えることが出来ればいいと思うのです。そこまでキチンと理解させて、初めてアイガモ農法の意味があるような気がするのです。」

目指すものは・・・

「この地域は、他の中山間地同様、少子高齢化でお年寄りの数がとても多いですが、昔の人は“ずっとエライ人”が多い。肉体的にも精神的にも、僕ら若者はかなわないです。だから、苦労してきたそういう人達が報われるような“提案”が、少しでも出来ればいいと思っています。」

「僕たちの取組はボランティア活動ではないから、当然ながら利益を出さないといけな。まだまだ試行錯誤ですが、経済的にも持続できる仕組みを作っていく事が重要だと考えます。そして最終的に目指しているのは、“商売”＋“環境保全”＋“文化の継承”です。」

おっとりと、しかし秘めたる情熱をその眼差しに込めた浜田さんは、しっかりと口調で今後の抱負を語ってくれた。会社としても、プロフェッショナルとしての農業も、まだまだ“駆けだし”ではあるが、その未熟さをカバーして余りある情熱が、こちらにも伝わってくる。



ところで、“ちから”という名前の由来は、86歳になる地元のおばあちゃんの言葉にあるという。

「野菜には力がないといかん。力がある野菜を作るには、土に力がないといかん。力のある土に育てられた力のある野菜を食べたら、体に力が出てくる。」
「だから、“力”ある土に育てられた“力”ある食べ物を通して、“生きる力”を、この四万十の“地から”届けたい。そして、年々過疎が進み、廃れていくふる里に対し、応援してくださる皆さんの力も頂きたい、そういうことで、この会社を僕らは“ちから”と名付けたのです。」

地元の先輩達に教わりながら、新たな地域の可能性を模索する、(株)ちからの挑戦は、まだ始まったばかりだ。

